



東京部会(第79回)

日時: 2015年11月26日(木) 19:00-21:15

場所: 日本大学経済学部本館2階中会議室

参加者: [順不同] 篠原総一(京都学園大学)、加藤一誠(慶応義塾大学)、杉田孝之(千葉県立津田沼高等学校)、石山晴美(東京証券取引所)、鈴木深(東京証券取引所)、大倉泰裕(千葉県立松戸向陽高等学校)、升野伸子(筑波大学附属中学校)、埴枝里子(東京都立府中東高等学校)、中沖栄(清水書院)、梶ヶ谷穰(昭和音楽大学)、星典男(鎌倉市立大船中)、高橋信弘(筑波大学院)、滝沢弘勝(筑波大学院)、鈴木孝治(日本経済教育センター)、新井明(上智大学非常勤講師)、以上15名。

【内容要旨】

(1) 年次大会の内容構成を検討した。

柱として、一つは高校入試問題を素材とした経済教育のあり方(高校入試問題検討プロジェクト)の報告と討論を予定。もう一つの柱として、経済教育の新しい実践の報告を予定。後者に関しては、候補の先生の出席可能性や内容に関してさらに次回までに詰めておいて、決定することとなった。

(2) 冬の教室の準備状況・申し込み状況

現在の状況を確認した。申込者数がこの時点では把握できないために、次回の部会で人数を確認したうえで、さらに取り組みを強めることとなった。

(3) 部会報告など

名古屋部会に、部会間交流で杉田先生(津田沼高校)が派遣されることになった。

(4) 教材検討

a. 教材「アリとキリギリス(時間の経済学)」の報告が埴先生からあった。パンフレットはほぼ完成。それと併用するパワーポイントの資料を作成。教材パンフレットとの平仄を合わせて、活用配付できるように準備をすることが報告された。討議では、この教材をどの場面で使うのかに関して検討が行われた。(案1)トレード・オフ、機会費用と合わせて経済の導入として使う。(案2)市場金利を教えるための手がかりとして、ローンや投資の決定の場面に発展させる前提として使う。(案3)経済に興味・関心を向かせる投げ込み教材として使う。の三案がだされ、今後の検討課題となった。

b. 教案「時間割引率をどう扱うか」の説明が大倉先生からあった。埴先生が開発された教材を踏まえた。時間割引率の授業を行う場合の流れを整理したものである。大倉先生は、時間割引率を授業で扱うべきかどうかは疑問だが、お金でないと分かりにくいと思われるので、金額を明示した内容を作成したと説明。篠原先生からは、割引率の概念を分からせることは難しいが、大竹先生のかつての社会実験の事例などを組み込んでさらに教材化できるかを検討したらどうかとのコメントがあった。

c. 授業案「法と経済の授業設計ー私たちの働く在り方を考えるー」の説明が杉田先生からあった。これは、名古屋部会にもってゆく教材案である。この教材案では、労働の供給に関して注目させて、労働時間の決定要因を押さえたうえで、情報の非対称性から、労働市場や企業の問題を理解させて、最後に法の立場と経済の立場を対比させるかたちで働き方を考えさせる構成をとっている。討議では、この授業案は非正規ベースでの労働供給を考えているがそれだけでいいのか、労働供給だけでなく労働需要の面からも労働時間や雇用を考える必要があるのではないか、グラフを使って労働時間を無理に理解させることはないのではないか、などの疑問や指摘がされた。生徒にとってはキャリア教育との関係なども含めて、働くことの意味や客観的な理解は重要なので、名古屋部会での検討を踏まえて、さらに教材として完成させてゆくべきとなった。

d. 授業案「効率と公正の考え方をういて望ましい年金制度について考える」の説明が升野先生からあった。こ



の教材は、筑波大学附属中学校の本年度の研究協議会での研究授業での授業案である。この授業案では、年金制度の型を提示したうえで、生徒が話し合いをして、のぞましい型を提示してそれを評価し合うという流れである。中学生にとって難しい年金の理解を図示することで理解を促進すると言う点で、意欲的な学習指導案である。討論では、図示したパターンは個人モデルであり社会全体のモデルとするにはもう一工夫必要であること。モデルそのものが積み立て方式を前提としているが現在は賦課方式となっている。年金制度の仕組みを正確に伝えていないのでは。などの疑問がだされた。しかし、年金に対して負担と給付の考え方をもとに、効率と公正概念で検討させるという点で、大事な問題提起をしており、さらにモデルの検討をすることで完成された教材としてゆくこととなった。

e. 筑波大附属中の二学期期末考査のテスト問題が紹介された。観点別評価を生徒が自分で気づくような返却時の解答例プリントが注目された。

(5) 情報提供

新井から、先日行われた日本社会科教育学会での発表原稿「中学生はどこまで経済の基本概念を理解できるか」の紹介が行われた。これは、定期考査の返却時に生徒にアンケートを取り、どこまで概念や理論を理解したかを自己申告させたデータを分析したものである。生徒は、概念を理解するより暗記してしまうこと。その結果、直接金融と間接金融の関係などは逆転して覚えてしまっていること。シミュレーション教材の有効性は身近で単純であるほど効果的であることなどが報告された。

学会報告からは、行動経済学を取り入れた実践や授業構想がではじめていることもあわせ報告された。

(6) まとめ

参加者からそれぞれ感想などをいただいて終了した。実践報告や授業案が多数提案された、充実した部会となった。

(文責、新井)

次回開催予定:12月16日(水)18:30~20:30。場所は日本大学経済学部。議題は、冬の教室準備、年次大会内容確定、教材に関するディスカッション、定期テストなどの情報交換、他。終了後、納め会を予定。